

基本計画書

基本計画									
事項	記入欄								備考
計画の区分	研究科の専攻に係る課程の変更								
フリガナ設置者	がかりおん トキョウノキョウダイガク								
フリガナ大学の名称	トキョウノキョウダイガク								
大学本部の位置	東京都世田谷区桜丘1丁目1番地1号								
大学の目的	本大学は、その伝統及び私立大学の特性を活かしつつ、教育基本法に則り、生命科学、環境科学、情報科学、生物産業学等を含む広義の農学の理論及び応用を教授し、有能な人材を育成すると共に、前記の学術分野に関する研究及び研究者の養成をなすことを使命とする。								
新設学部等の目的	生命科学分野の広い知識に加え、目に見えないミクロの世界で起こる有益で、かつ危険な生物作用の理解を基礎として、高度な微生物の取扱や、先端機器を用いた微生物機能の研究、さらに微生物の特性を考慮した微生物利用技術を開発する能力を養成する。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	【基礎となる学部】 生命科学部 分子微生物学科 生命科学研究所 分子微生物学専攻 (M)
	生命科学研究所 [Graduate School of Life Sciences] 分子微生物学専攻 (D) [Department of Molecular Microbiology] 計	年	人	年次 人	人	博士 (農学) 【Doctor of Philosophy in Agricultural Science】	令和5年4月 第 年次	東京都世田谷区桜丘1-1-1	
		3	3	—	9				
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	生命科学研究所 分子生命化学専攻 (D) (3) (令和4年4月届出) 地域環境科学研究科 地域創成科学専攻 (D) (2) (令和4年4月届出) 国際食料農業科学研究科 国際食農科学専攻 (D) (2) (令和4年4月届出) 令和5年4月名称変更予定 国際食料情報学部 国際バイオビジネス学科→アグリビジネス学科								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
	分子微生物学専攻 (D)	講義	演習	実験・実習	計				
		4 科目	3 科目	1 科目	8 科目	16 単位			
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等
				教授	准教授	講師	助教	計	助手
	新設	生命科学研究所 分子微生物学専攻 (D)	5 (5)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	3 (3)
	設置	生命科学研究所 分子生命化学専攻 (D)	4 (4)	5 (5)	0 (0)	1 (1)	10 (10)	0 (0)	3 (3)
	組織	地域環境科学研究科 地域創成科学専攻 (D)	9 (9)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	1 (1)
	分	国際食料農業科学研究科 国際食農科学専攻 (D)	5 (5)	5 (5)	0 (0)	1 (1)	11 (11)	0 (0)	2 (2)
	の	計	23 (23)	17 (17)	0 (0)	2 (2)	42 (42)	0 (0)	— (—)
	概	農学研究科 農学専攻 (D)	13 (13)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	18 (18)	0 (0)	3 (3)
	要	動物科学専攻 (D)	11 (11)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	4 (4)
	分	バイオセラピー学専攻 (D)	11 (11)	2 (2)	0 (0)	1 (1)	14 (14)	0 (0)	1 (1)
	応用生物科学研究科 農芸化学専攻 (D)	11 (11)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	2 (2)	

教 員 組 織 の 概 要	既 設	醸造学専攻 (D)	8 (8)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	1 (1)	
		食品安全健康学専攻 (D)	11 (11)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	1 (1)	
		食品栄養学専攻 (D)	12 (12)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	17 (17)	0 (0)	4 (4)	
		生命科学研究所 バイオサイエンス専攻 (D)	9 (9)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	1 (1)	
		地域環境科学研究科 林学専攻 (D)	8 (8)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	2 (2)	
		農業工学専攻 (D)	11 (11)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	3 (3)	
		造園学専攻 (D)	8 (8)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	3 (3)	
		国際食料農業科学研究科 国際農業開発学専攻 (D)	10 (10)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	2 (2)	
		農業経済学専攻 (D)	9 (9)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	2 (2)	
		国際アグリビジネス学専攻 (D)	8 (8)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	2 (2)	
		生物産業学研究科 生物産業学専攻 (D)	29 (29)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	30 (30)	0 (0)	0 (0)	
		計	169 (169)	60 (60)	0 (0)	1 (1)	230 (230)	0 (0)	— (—)	
	合計	192 (192)	77 (77)	0 (0)	3 (3)	272 (272)	0 (0)	— (—)		
教員以外の職員の概要	職 種	専 任	兼 任	計						
	事 務 職 員	151人 (151人)	9人 (9人)	160人 (160人)						
	技 術 職 員	21人 (21人)	5人 (5人)	26人 (26人)						
	図 書 館 専 門 職 員	5人 (5人)	1人 (1人)	6人 (6人)						
	そ の 他 の 職 員	1人 (1人)	7人 (7人)	8人 (8人)						
計	178人 (178人)	22人 (22人)	200人 (200人)							
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
	校 舎 敷 地	354,079.78㎡	0㎡	15,350.76㎡	369,430.54㎡	東京農業大学第一 高等学校(収容定員 975人、面積基準 運動場8,400㎡)、 中等部(収容定員 525人、面積基準 運動場6,450㎡) と共用 借上面積： 3,570.24㎡ 借用期間：60年				
	運 動 場 用 地	31,147.98㎡	30,935.81㎡	6,453.99㎡	68,537.78㎡					
	小 計	385,227.76㎡	30,935.81㎡	21,804.75㎡	437,968.32㎡					
	そ の 他	2,666,435.56㎡	0㎡	0㎡	2,666,435.56㎡					
	合 計	3,051,663.32㎡	30,935.81㎡	21,804.75㎡	3,104,403.88㎡					
校 舎	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	大学全体					
	219,689.36㎡ (219,689.36㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	219,689.36㎡ (219,689.36㎡)						
教 室 等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体				
	101室	80室	712室	8室 (補助職員0人)	0室 (補助職員0人)					
専任教員研究室		新設学部等の名称 分子微生物学専攻 (D)		室 数 15 室						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	○大学全体での共 用分324,097 〔34,276〕 ○学術雑誌・視聴 覚資料は大学全体 の数 ○標本 学部単位での特定 不能なため、大学 全体の数		
	分子微生物学専攻	237,209 [43,291] (227,793 [42,197])	17,159 [9,301] (17,159 [9301])	7,327 [7,115] (7,327 [7,115])	7,834 (7,639)	1,009 (1,009)	33,778 (33,778)			
	計	237,209 [43,291] (227,793 [42,197])	17,159 [9,301] (17,159 [9,301])	7,327 [7,115] (7,327 [7,115])	7,834 (7,639)	1,009 (1,009)	33,778 (33,778)			
図 書 館	面積		閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数					
	8,026.19㎡		1,383		1,162,296					
体 育 館	面積		体育館以外のスポーツ施設の概要				大学全体			
	10,371.27㎡		野 球 場 2 面 テ ニ ス コ ー ト 4 面							

経費の見積り 及び維持方法の概要	区分		開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	研究科単位での算出不能なため、学部との合計	
	教員1人当り研究費等			366千円	366千円	366千円	—	—	—		
	共同研究費等			3,904千円	3,904千円	3,904千円	—	—	—		
	図書購入費		165千円	165千円	165千円	165千円	—	—	—		
	設備購入費		2,981千円	1,770千円	1,770千円	1,770千円	—	—	—		
学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次					
	1,614.6千円	1,374.6千円	1,424.6千円	—千円	—千円	—千円					
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金収入、寄付金収入、手数料収入等								
既設大学の状況	大学の名称		東京農業大学大学院								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
		年	人	年次人	人		倍				
	農学研究科										
	博士前期課程						1.17				
	農学専攻	2	14	—	28	修士（農学）	0.99	昭和28年度	神奈川県厚木市船子1737		
	動物科学専攻	2	12	—	24	修士（農学）	1.25	昭和61年度	同上		
	生物資源開発学専攻	2	10	—	20	修士（農学）	1.40	令和4年度	同上		
	デザイン農学専攻	2	8	—	16	修士（農学）	1.12	令和4年度	同上		
	バイオセラピー学専攻	2	—	—	—	修士（農学）	—	平成22年度	同上	令和4年4月学生募集停止	
	博士後期課程						0.40				
	農学専攻	3	5	—	15	博士（農学）	0.33	昭和37年度	同上		
	動物科学専攻	3	4	—	12	博士（農学）	0.50	平成2年度	同上		
	バイオセラピー学専攻	3	3	—	9	博士（農学）	0.44	平成24年度	同上		
	応用生物科学研究科										
	博士前期課程						1.02				
	農芸化学専攻	2	30	—	60	修士（農学）	1.08	令和2年度	東京都世田谷区桜丘1-1-1		
	醸造学専攻	2	20	—	40	修士（農学）	1.12	令和2年度	同上		
	食品安全健康学専攻	2	20	—	40	修士（農学）	0.87	令和2年度	同上		
	食品栄養学専攻	2	6	—	12	修士（農学）	0.91	令和2年度	同上		
	博士後期課程						0.22				
	農芸化学専攻	3	5	—	15	博士（農学）	0.20	令和2年度	同上		
	醸造学専攻	3	2	—	6	博士（農学）	0.16	令和2年度	同上		
	食品安全健康学専攻	3	3	—	9	博士（農学）	0.22	令和2年度	同上		
	食品栄養学専攻	3	2	—	6	博士（農学）	0.33	令和2年度	同上		
	生命科学研究所										
	博士前期課程						1.79				
	バイオサイエンス専攻	2	30	—	60	修士（農学）	1.66	令和3年度	東京都世田谷区桜丘1-1-1		
	修士課程										
	分子生命化学専攻	2	20	—	40	修士（農学）	1.92	令和3年度	同上		
	分子微生物学専攻	2	20	—	40	修士（農学）	1.87	令和3年度	同上		
	博士後期課程						0.10				
	バイオサイエンス専攻	3	5	—	15	博士（農学）	0.10	令和3年度	同上		
	地域環境科学研究科										
	博士前期課程						1.26				
	林学専攻	2	8	—	16	修士（農学）	1.06	令和3年度	東京都世田谷区桜丘1-1-1		
	農業工学専攻	2	8	—	16	修士（農学）	1.37	令和3年度	同上		
	造園学専攻	2	10	—	20	修士（農学）	1.35	令和3年度	同上		
	修士課程										
	地域創成科学専攻	2	6	—	12	博士（農学）	1.24	令和3年度	同上		
	博士後期課程						0.83				
	林学専攻	3	8	—	24	博士（農学）	1.00	令和3年度	同上		
	農業工学専攻	3	8	—	24	博士（農学）	1.25	令和3年度	同上		
	造園学専攻	3	10	—	30	博士（農学）	0.25	令和3年度	同上		

既設大学等の状況	国際食料農業科学研究科 博士前期課程						0.83				
	国際農業開発学専攻	2	18	—	36	修士（農学）	0.96	令和3年度	東京都世田谷区桜丘1-1-1		
	農業経済学専攻	2	8	—	16	修士（農学）	0.43	令和3年度	同上		
	国際アグリビジネス学専攻	2	10	—	20	修士（農学）	0.75	令和3年度	同上		
	修士課程										
	国際食農科学専攻	2	7	—	14	博士（農学）	1.06	令和3年度	同上		
	博士後期課程						1.66				
	国際農業開発学専攻	3	2	—	6	博士（農学）	3.25	令和3年度	同上		
	農業経済学専攻	3	2	—	6	博士（農学）	0.50	令和3年度	同上		
	国際アグリビジネス学専攻	3	2	—	6	博士（農学）	1.25	令和3年度	同上		
	生物産業学研究科 博士前期課程							1.00			
	北方圏農学専攻	2	7	—	14	修士（農学）	0.78	平成22年度	北海道網走市八坂196		
	海洋水産学専攻	2	5	—	10	修士（農学）	0.80	平成22年度	同上		
	食香粧化学専攻	2	5	—	10	修士（農学）	1.90	平成22年度	同上		
	自然資源経営学専攻	2	3	—	6	修士（経営学）	0.33	平成22年度	同上		
	博士後期課程							0.29			
生物産業学専攻	3	8	—	24	博士（農学又は経営学）	0.29	平成7年度	同上			
大学等の名称	東京農業大学										
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地			
	年	人	年次人	人		倍					
農学部						1.04					
農学科	4	170	—	680	学士（農学）	1.04	昭和24年度	神奈川県厚木市船子1737			
動物科学科	4	140	—	560	学士（農学）	1.04	昭和24年度	同上			
生物資源開発学科	4	125	—	500	学士（農学）	1.04	平成30年度	同上			
デザイン農学科	4	123	—	492	学士（農学）	1.04	平成30年度	同上			
応用生物科学部						1.04					
農芸化学科	4	150	—	600	学士（農学）	1.05	平成10年度	東京都世田谷区桜丘1-1-1			
醸造科学科	4	150	—	600	学士（農学）	1.07	平成10年度	同上			
食品安全健康学科	4	150	—	600	学士（農学）	1.04	平成26年度	同上			
栄養科学科	4	120	—	480	学士（農学）	1.04	平成10年度	同上			
生命科学部						1.04					
バイオサイエンス学科	4	150	—	600	学士（農学）	1.04	平成29年度	東京都世田谷区桜丘1-1-1			
分子生命化学科	4	130	—	520	学士（農学）	1.02	平成29年度	同上			
分子微生物学科	4	130	—	520	学士（農学）	1.08	平成29年度	同上			
地域環境科学部						1.03					
森林総合科学科	4	130	—	520	学士（農学）	1.03	平成10年度	東京都世田谷区桜丘1-1-1			
生産環境工学科	4	130	—	520	学士（農学）	1.02	平成10年度	同上			
造園科学科	4	130	—	520	学士（農学）	1.03	平成10年度	同上			
地域創成科学科	4	100	—	400	学士（農学）	1.05	平成29年度	同上			
国際食料情報学部						1.04					
国際農業開発学科	4	150	—	600	学士（農学）	1.03	平成10年度	東京都世田谷区桜丘1-1-1			
食料環境経済学科	4	190	—	760	学士（農学）	1.03	平成10年度	同上			
国際バイオビジネス学科	4	150	—	600	学士（農学）	1.06	平成10年度	同上			
国際食農科学科	4	110	—	440	学士（農学）	1.05	平成29年度	同上			
生物産業学部						1.02					
北方圏農学科	4	91	—	373	学士（農学）	1.03	平成元年度	北海道網走市八坂196番地		令和2年度入学定員減（▲9）	
海洋水産学科	4	91	—	353	学士（農学）	1.05	平成18年度	同上		令和2年度編入学定員減（▲10）	
食香粧化学科	4	91	—	353	学士（農学）	0.98	平成元年度	同上		令和2年度入学定員増（11名）	
自然資源経営学科	4	90	—	360	学士（経営学）	1.02	平成元年度	同上		令和2年度入学定員増（11名）	
										令和2年度編入学定員減（▲12）	
										令和2年度編入学定員減（▲5）	

既設大学等の状況	大学の名称	東京情報大学大学院							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	総合情報学研究科 博士前期課程 総合情報学専攻	年	人	年次人	人	修士（総合情報学）	0.63 0.63	平成4年度	千葉県千葉市若葉区御成台4丁目1番地
	総合情報学研究科 博士後期課程 総合情報学専攻	3	3	—	9	博士（総合情報学）	0.22 0.22	平成11年度	同上
既設大学等の状況	大学の名称	東京情報大学							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	総合情報学部 総合情報学科	4	400	3年次10	1,620	学士（総合情報学）	1.16 1.16	平成25年度	千葉県千葉市若葉区御成台4丁目1番地
	看護学部 看護学科	4	100	—	400	学士（看護学）	0.84 0.84	平成29年度	同上
附属施設の概要	名称	目的					設置年月		
	1 図書館 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	学生の学習・研究活動の支援施設					平成26年4月		
	農学部図書館 (神奈川県厚木市船子1737)	学生の学習・研究活動の支援施設					平成10年4月		
	生物産業学部図書館 (北海道網走市八坂196)	学生の学習・研究活動の支援施設					平成元年4月		
	2 農学部の附属施設								
	伊勢原農場 (神奈川県伊勢原市三ノ宮前畑1499-1 他 (79, 910, 22㎡))	作物・園芸・環境緑化等の研究・実習					平成24年4月		
	富士農場 (静岡県富士宮市麓422)	畜産実習を中心とした実習教育 (323, 260.00㎡)					昭和17年		
	植物園 (神奈川県厚木市船子1737)	有用植物の収集・保存・展示					昭和22年		
	生き物連携センター (神奈川県厚木市船子1737)	人と動植物のかかわりを追求する教育・研究					平成19年4月		
	電子顕微鏡室 (神奈川県厚木市船子1737)	ウイルス・微生物等の微細構造解析					平成10年4月		
3 応用生物科学部の附属施設									
食品加工技術センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	食品加工に関する実践的教育・研究					平成10年4月			
4 生命科学部の附属施設									
高次生命機能解析センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	遺伝子組換え、栄養、生理、遺伝、発生など生命科学分野の研究					平成21年4月			
5 地域環境科学部の附属施設									
奥多摩演習林 (東京都西多摩郡奥多摩町氷川2137 (653, 016.00㎡))	森林のしくみ、育成方法、林業機械の実習等					昭和53年			
6 国際食料情報学部の附属施設									
宮古亜熱帯農場 (沖縄県宮古島市城辺字福里72-2) (98, 262.00㎡)	熱帯農業の実習教育・試験研究					昭和63年			
7 生物産業学部の附属施設									
網走寒冷地農場 (北海道網走市音根内59-8) (432, 174.00㎡)	寒冷地大規模農場の実習教育					昭和57年			
オホーツク臨海研究センター (北海道網走市能取港町1-1-2) (4, 656.60㎡)	海洋動植物の生態・生育・繁殖に関する研究					平成18年4月			
8 農生命科学研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	全学的な研究戦略の推進・実践					平成12年4月			
9 グローバル連携センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	海外研究機関との交流ならびに協力連携					平成18年4月			
10 「食と農」の博物館 (東京都世田谷区上用賀2-4-28)	教育・研究の成果を広く社会に公開					平成16年4月			

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科又は高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「－」又は「該当なし」と記入すること。

教 育 課 程 等 の 概 要																
(生命科学研究科 分子微生物学専攻 博士後期課程)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
生命科学 共通科目	知的財産管理法・研究倫理特論	1前		1		○			1						兼3	オムニバス
	インターンシップ	2前		2				○	5	5						
	小計(2科目)	—	0	3	0			—	5	5	0	0	0		兼3	
専攻科目	基礎科目 英語論文作成法	1後	2			○			5	5						
	小計(1科目)	—	2	0	0			—	5	5	0	0	0		兼0	
	特論科目 微生物機能科学後期特論	1前		2		○			2	2						
	微生物共生作用学後期特論	1前		2		○			3	3						
小計(2科目)	—	0	4	0			—	5	5	0	0	0		兼0		
研究 科目 指導	特別研究指導Ⅰ	1通	4					○	5	5						
	特別研究指導Ⅱ	2通	4					○	5	5						
	特別研究指導Ⅲ	3通	4					○	5	5						
	小計(3科目)	—	12	0	0			—	5	5	0	0	0		兼0	
合計(8科目)		—	14	7	0			—	5	5	0	0	0		兼3	
学位又は称号		博士(農学)			学位又は学科の分野			農学関係								
卒業要件及び履修方法								授業期間等								
【修了要件】 3年以上在学し、所定の授業科目について16単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、当該研究科が行う博士論文の審査及び最終試験に合格すること。 【履修要件】 必修科目14単位、選択必修科目2単位（特論科目の中から主たる研究領域を選択）の合計16単位以上を修得すること。								1学年の学期区分			2期					
								1学期の授業期間			15週					
								1時限の授業時間			90分					

(注)

- 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

授 業 科 目 の 概 要			
（生命科学研究所 分子微生物学専攻 博士後期課程）			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
生命科学 研究所 共通科目	知的財産管理法・研究倫理特論	<p>（概要）</p> <p>研究を行い、さらに学術論文、学会発表する上で、生命倫理と研究倫理を理解することは非常に重要である。そこで、本科目は倫理についてコンプライアンスを含め様々な視点から理解し、様々な研究分野での注意点を例示しながら、研究者としての倫理観を涵養することを目的とする。さらに将来の外部研究費申請を見据えて、その研究倫理管理についても解説する。また近年、農業分野の技術やブランドを知的財産として認め、これを保護して活用することで新しい価値を創造していこうとする機運が高まっている。そこで、知的財産について、事例を多く交えながらわかりやすく解説する。知的財産制度の概要を知ることで、今まで知らなかった知的財産の可能性を理解してもらう。</p> <p>（オムニバス方式／全8回：単位認定者 3 川崎 信治） （3 川崎 信治／2回）</p> <p>分子微生物学に関する責任ある研究行為、研究における不正行為、データの取り扱い、共同研究のルール、オーサiership、盗用、公的研究費の取り扱いについて教授する。さらに、知的財産権を含む研究成果の取り扱いについても教授する。</p> <p>（11 小川 英彦／2回）</p> <p>バイオサイエンス学に関する責任ある研究行為、研究における不正行為、データの取り扱い、共同研究のルール、オーサiership、盗用、公的研究費の取り扱いについて教授する。さらに、知的財産権を含む研究成果の取り扱いについても教授する。</p> <p>（12 矢島 新／2回）</p> <p>分子生命化学に関する責任ある研究行為、研究における不正行為、データの取り扱い、共同研究のルール、オーサiership、盗用、公的研究費の取り扱いについて教授する。さらに、知的財産権を含む研究成果の取り扱いについても教授する。</p> <p>（13 稲本 進／2回）</p> <p>研究における不正行為が生まれる背景や環境について、また論文投稿における倫理的な注意点などについて、適正な判断と行動を行うための科学研究者倫理の点から教授する。</p>	オムニバス方式
	インターンシップ	インターンシップとは、学生の将来のキャリア・プランに関連して、大学院在籍中に一定期間を企業などで就業体験することによって、仕事の本質を理解し、さらなるキャリア・プランの構築を図るものである。本科目は、実際の職場において就業体験を積むことにより、自身の適性を認識し、職業観を深め、職業選択に役立たせることを目的とする。	
専攻科目	基礎科目 英語論文作成法	研究の成果を国際的に発信することは、研究者として最も大切なことである。そのためには、英語による論文を作成し、国際的な学術雑誌に掲載することが必要である。そのために本科目は、担当教員の指導課題に沿った研究を通して得られた成果をもとに、英語論文を作成する能力を身につけることを目指す。	
	特論科目 微生物機能科学特論	資源、健康、環境保全といった今日の重要課題の解決には、その共通の課題に深く関与する微生物を通じた生命現象の本質的理解が必須である。またヒトのQOL向上において微生物の貢献する割合は極めて高く、いまだ新規微生物の機能が開発されている。本特論では、資源、健康、環境保全に役立つ基礎研究について探求すること、また有用微生物の分離から、目的機能のスクリーニングや実用化に向けての様々な課題をクリアすることを目的として、自然界から探索した有用微生物をはじめとして、光合成生物や乳酸菌など食品微生物、各種腸内細菌（抗生物質耐性菌、遺伝子組み換え細菌、病原菌など）を研究材料として用いる。各種微生物におけるストレス応答とその防御機構、さらに新たに微生物機能を開発するための知識や技術を習得するよう教授する。	

専攻科目	特論科目	微生物共生作用学特論	<p>環境において微生物は微生物叢を形成している場合が多いとともに、動植物あるいはその共生微生物（有用微生物、病原微生物）に対して正あるいは負に様々な作用を及ぼし得る。これらの作用の仕組み、及びその意義を解明するには分子レベルで解析を行うことが重要となる。そのため、本特論では微生物自身の機能や他の微生物、その他の環境要因との関係性を分子の視点から理解するよう教授する。</p> <p>DNAを通して微生物を見るPCR法をきっかけに、細胞レベルで生きる巨大な微生物群集の新しい姿が明らかになってきた。サイズが小さく環境に露出して生きる微生物にとって、まず自分の仲間と、そしておそらくすべての多細胞生物との間に張り巡らしている広い意味での共生のネットワークは、生きるための必須の役割を担っている。その共生関係が、微生物という生き方を特徴づける鍵となることを理解できるよう教授する。</p>	
研究指導科目		特別研究指導 I	<p>(概要)</p> <p>本専攻では生命科学の最先端知識・技術の修得を通して、特に目に見えないミクロの生物圏における学術知識の習得を重視した創造的・独創的な教育研究を推進する。そのために生命科学を基盤に最先端知識・技術を駆使して、分子微生物学にかかわる研究者、教育者あるいは専門家としての総合力を確立するために、各分野を専門とする教員が博士論文の作成に必要な研究の計画・実施・結果の評価・発表・論文作成など各段階について指導する。そこで特別指導研究Iでは、研究課題を設定し、研究計画を立案する。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 内野 昌孝(指導教員))(複合微生物学)</p> <p>自然と人工が混ざった環境である食品の発酵は複数の微生物により成分の分解や代謝物の生産が行われ、経時的に変化していく。発酵に対して関わる微生物の機能について分子レベルで理解することを目指す。</p> <p>(2 笠原 浩司(指導教員))(動物共生学)</p> <p>ほ乳類やそのモデル生物の、共生微生物や栄養その他、内外の環境との相互作用の仕組みやその生物学的意義の解明、新たな微生物の単離やその生産物の有効利用、などに関して、過去、あるいは現在において行われている研究の実例を元に、自身の研究計画とその具体的な進め方、実際のデータの解析を目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(3 川崎 信治(指導教員))(資源生物学)</p> <p>自然環境からの有用微生物を単離し、その優れた能力を生み出す酵素反応や代謝機能などの解析を通じて、人類への貢献を目指す。具体的には光を利用する微生物による光物質生産、嫌気環境で生きる微生物の酸素耐性メカニズムの解明に基づく大気下での有効利用法の開発を目指す。</p> <p>(4 齋藤 宏昌(指導教員))(植物共生微生物学)</p> <p>植物に共生、寄生する微生物と宿主植物の相互作用について、微生物側の共生、寄生、感染戦略、それに対する植物の応答の解明を目指す。様々な植物病原微生物の感染に必要とされる制御経路を明らかにし、新たな病害防除法の確立を目指す。</p> <p>(5 田中 尚人(指導教員))(バイオインフォマティクス学)</p> <p>微生物の有用な性質や新規性のある性質を見だし、応用利用するための生物情報の解析技術や分子生物学的手法による検証および開発が微生物学には求められている。本演習では研究対象となる微生物をあらゆる側面から解析し、新たな知見を得るための研究の推進および成果のまとめ方を修得することを目指す。</p>	

<p style="text-align: center;">研究 指導 科目</p>		<p>(6 佐藤 拓海 (指導補助教員)) (資源生物学) 環境や腸内に棲息する細菌の形態や代謝バランスなどの生理状態を解析し、各細菌特有の様々な環境における生存戦略機構および、未知の生命現象の発見・解明を目指すと共に、細菌の生理状態の変化が環境や宿主に及ぼす影響を解析し、人々の暮らしを豊かにするような社会貢献を目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(7 志波 優 (指導補助教員)) (バイオインフォマティクス学) 次世代シーケンサーから得られる莫大な量の塩基配列情報から有用な生物学的知見を得るためには様々なバイオインフォマティクス解析手法が必須である。そこで、ゲノム情報からの微生物機能解析技術や、メタゲノム情報による微生物群集解析に関わる新規解析手法の開発を目指す。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(8 鈴木 智典 (指導補助教員)) (複合微生物学) 様々な環境において単一の微生物のみが存在するといったことは稀であり、複数種の微生物が共存した複合微生物系を形成している。そして、それらの微生物は低分子化合物やタンパク質などの相互作用を通して共生または競争している。そこで、微生物間の相互作用に関与する分子の分離や構造と機能解析を目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(9 細田 浩司 (指導補助教員)) (動物共生学) 動物に共生する微生物と宿主の間で行われる様々な相互作用において、微生物構成成分やその代謝産物が宿主の個体あるいは細胞に与える影響についての研究に関して、過去、あるいは現在において行われている研究の実例を元に、自身の研究計画とその具体的な進め方、実際のデータの解析などを習得することを目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(10 山本 紘輔 (指導補助教員)) (植物共生微生物学) 高塩・高温等の過酷な環境下で生育可能な植物と共生する微生物の多様性を解析するとともに、植物にとって有用な微生物を単離し、植物-有用微生物間相互作用を分子レベルで解析する。特に有用微生物による植物側の応答反応を解明することにより、新たな有用微生物を活用した資材の開発を目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p>	
---	--	--	--

研究指導科目	特別研究指導Ⅱ	<p>(概要)</p> <p>本専攻では生命科学の最先端知識・技術の修得を通して、特に目に見えないミクロの生物圏における学術知識の習得を重視した創造的・独創的な教育研究を推進する。そのために生命科学を基盤に最先端知識・技術を駆使して、分子微生物学にかかわる研究者、教育者あるいは専門家としての総合力を確立するために、各分野を専門とする教員が博士論文の作成に必要な研究の計画・実施・結果の評価・発表・論文作成など各段階について指導する。そこで特別指導研究Ⅱでは、特別指導研究Ⅰの成果を基に創造的・独創的な教育研究を推進する。</p> <p>各担当教員の指導課題は以下の通りである。</p> <p>(1 内野 昌孝 (指導教員)) (複合微生物学) 自然と人工が混ざった環境である食品の発酵は複数の微生物により成分の分解や代謝物の生産が行われ、経時的に変化していく。発酵に対して関わる微生物の機能について分子レベルで理解することを目指す。</p> <p>(2 笠原 浩司 (指導教員)) (動物共生学) ほ乳類やそのモデル生物の、共生微生物や栄養その他、内外の環境との相互作用の仕組みやその生物学的意義の解明、新たな微生物の単離やその生産物の有効利用、などに関して、過去、あるいは現在において行われている研究の実例を元に、自身の研究計画とその具体的な進め方、実際のデータの解析を目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(3 川崎 信治 (指導教員)) (資源生物工学) 自然環境からの有用微生物を単離し、その優れた能力を生み出す酵素反応や代謝機能などの解析を通じて、人類への貢献を目指す。具体的には光を利用する微生物による光物質生産、嫌気環境で生きる微生物の酸素耐性メカニズムの解明に基づく大気下での有効利用法の開発を目指す。</p> <p>(4 齋藤 宏昌 (指導教員)) (植物共生微生物学) 植物に共生、寄生する微生物と宿主植物の相互作用について、微生物側の共生、寄生、感染戦略、それに対する植物の応答の解明を目指す。様々な植物病原微生物の感染に必要なとされる制御経路を明らかにし、新たな病害防除法の確立を目指す。</p> <p>(5 田中 尚人 (指導教員)) (バイオインフォマティクス学) 微生物の有用な性質や新規性のある性質を見だし、応用利用するための生物情報の解析技術や分子生物学的手法による検証および開発が微生物学には求められている。本演習では研究対象となる微生物をあらゆる側面から解析し、新たな知見を得るための研究の推進および成果のまとめ方を修得することを目指す。</p> <p>(6 佐藤 拓海 (指導補助教員)) (資源生物工学) 環境や腸内に棲息する細菌の形態や代謝バランスなどの生理状態を解析し、各細菌特有の様々な環境における生存戦略機構および、未知の生命現象の発見・解明を目指すと共に、細菌の生理状態の変化が環境や宿主に及ぼす影響を解析し、人々の暮らしを豊かにするような社会貢献を目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(7 志波 優 (指導補助教員)) (バイオインフォマティクス学) 次世代シーケンサーから得られる莫大な量の塩基配列情報から有用な生物学的知見を得るためには様々なバイオインフォマティクス解析手法が必須である。そこで、ゲノム情報からの微生物機能解析技術や、メタゲノム情報による微生物群集解析に関わる新規解析手法の開発を目指す。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(8 鈴木 智典 (指導補助教員)) (複合微生物学) 様々な環境において単一の微生物のみが存在するといったことは稀であり、複数種の微生物が共存した複合微生物系を形成している。そして、それらの微生物は低分子化合物やタンパク質などの相互作用を通して共生または競争している。そこで、微生物間の相互作用に関与する分子の分離や構造と機能解析を目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p>	
--------	---------	---	--

<p style="text-align: center;">研究 指導 科目</p>		<p>(9 細田 浩司 (指導補助教員)) (動物共生学) 動物に共生する微生物と宿主の間で行われる様々な相互作用において、微生物構成成分やその代謝産物が宿主の個体あるいは細胞に与える影響についての研究に関して、過去、あるいは現在において行われている研究の実例を元に、自身の研究計画とその具体的な進め方、実際のデータの解析などを習得することを目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(10 山本 紘輔 (指導補助教員)) (植物共生微生物学) 高塩・高温等の過酷な環境下で生育可能な植物と共生する微生物の多様性を解析するとともに、植物にとって有用な微生物を単離し、植物-有用微生物間相互作用を分子レベルで解析する。特に有用微生物による植物側の応答反応を解明することにより、新たな有用微生物を活用した資材の開発を目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p>	
---	--	---	--

<p>研究指導科目</p>	<p>特別研究指導Ⅲ</p>	<p>(概要) 本専攻では生命科学の最先端知識・技術の修得を通して、特に目に見えないミクロの生物圏における学術知識の習得を重視した創造的・独創的な教育研究を推進する。そのために生命科学を基盤に最先端知識・技術を駆使して、分子微生物学にかかわる研究者、教育者あるいは専門家としての総合力を確立するために、各分野を専門とする教員が博士論文の作成に必要な研究の計画・実施・結果の評価・発表・論文作成など各段階について指導する。そこで特別指導研究Ⅲでは、研究成果を国際的に発信・討論できる能力を養成する。</p> <p>各担当教員の指導課題は次の通りである。</p> <p>(1 内野 昌孝 (指導教員)) (複合微生物学) 自然と人工が混ざった環境である食品の発酵は複数の微生物により成分の分解や代謝物の生産が行われ、経時的に変化していく。発酵に対して関わる微生物の機能について分子レベルで理解することを目指す。</p> <p>(2 笠原 浩司 (指導教員)) (動物共生学) ほ乳類やそのモデル生物の、共生微生物や栄養その他、内外の環境との相互作用の仕組みやその生物学的意義の解明、新たな微生物の単離やその生産物の有効利用、などに関して、過去、あるいは現在において行われている研究の実例を元に、自身の研究計画とその具体的な進め方、実際のデータの解析を目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(3 川崎 信治 (指導教員)) (資源生物学) 自然環境からの有用微生物を単離し、その優れた能力を生み出す酵素反応や代謝機能などの解析を通じて、人類への貢献を目指す。具体的には光を利用する微生物による光物質生産、嫌気環境で生きる微生物の酸素耐性メカニズムの解明に基づく大気下での有効利用法の開発を目指す。</p> <p>(4 齋藤 宏昌 (指導教員)) (植物共生微生物学) 植物に共生、寄生する微生物と宿主植物の相互作用について、微生物側の共生、寄生、感染戦略、それに対する植物の応答の解明を目指す。様々な植物病原微生物の感染に必要とされる制御経路を明らかにし、新たな病害防除法の確立を目指す。</p> <p>(5 田中 尚人 (指導教員)) (バイオインフォマティクス学) 微生物の有用な性質や新規性のある性質を見だし、応用利用するための生物情報の解析技術や分子生物学的手法による検証および開発が微生物学には求められている。本演習では研究対象となる微生物をあらゆる側面から解析し、新たな知見を得るための研究の推進および成果のまとめ方を修得することを目指す。</p> <p>(6 佐藤 拓海 (指導補助教員)) (資源生物学) 環境や腸内に棲息する細菌の形態や代謝バランスなどの生理状態を解析し、各細菌特有の様々な環境における生存戦略機構および、未知の生命現象の発見・解明を目指すと共に、細菌の生理状態の変化が環境や宿主に及ぼす影響を解析し、人々の暮らしを豊かにするような社会貢献を目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(7 志波 優 (指導補助教員)) (バイオインフォマティクス学) 次世代シーケンサーから得られる莫大な量の塩基配列情報から有用な生物学的知見を得るためには様々なバイオインフォマティクス解析手法が必須である。そこで、ゲノム情報からの微生物機能解析技術や、メタゲノム情報による微生物群集解析に関わる新規解析手法の開発を目指す。尚、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(8 鈴木 智典 (指導補助教員)) (複合微生物学) 様々な環境において単一の微生物のみが存在するといったことは稀であり、複数種の微生物が共存した複合微生物系を形成している。そして、それらの微生物は低分子化合物やタンパク質などの相互作用を通して共生または競争している。そこで、微生物間の相互作用に関与する分子の分離や構造と機能解析を目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p>	
---------------	----------------	---	--

<p style="text-align: center;">研究 指導 科目</p>		<p>(9 細田 浩司 (指導補助教員)) (動物共生学) 動物に共生する微生物と宿主の間で行われる様々な相互作用において、微生物構成成分やその代謝産物が宿主の個体あるいは細胞に与える影響についての研究に関して、過去、あるいは現在において行われている研究の実例を元に、自身の研究計画とその具体的な進め方、実際のデータの解析などを習得することを目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p> <p>(10 山本 紘輔 (指導補助教員)) (植物共生微生物学) 高塩・高温等の過酷な環境下で生育可能な植物と共生する微生物の多様性を解析するとともに、植物にとって有用な微生物を単離し、植物-有用微生物間相互作用を分子レベルで解析する。特に有用微生物による植物側の応答反応を解明することにより、新たな有用微生物を活用した資材の開発を目指す。なお、本教員は上記研究課題の指導を補助する。</p>	
---	--	---	--

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

学校法人東京農業大学 設置認可等に関わる組織の移行表

令和4年度

入学 編入学 収容
定員 定員 定員

東京農業大学大学院 農学研究科	14	—	28
農学専攻(M)	12	—	24
動物科学専攻(M)	10	—	20
生物資源開発学専攻(M)	8	—	16
デザイン農学専攻(M)	5	—	15
農学専攻(D)	4	—	12
動物科学専攻(D)	3	—	9
バイオセラピー学専攻(D)			
応用生物科学研究科	30	—	60
農芸化学専攻(M)	20	—	40
醸造学専攻(M)	20	—	40
食品安全健康学専攻(M)	6	—	12
食品栄養学専攻(M)	5	—	15
農芸化学専攻(D)	2	—	6
醸造学専攻(D)	3	—	9
食品安全健康学専攻(D)	2	—	6
食品栄養学専攻(D)			
生命科学研究科	30	—	60
バイオサイエンス専攻(M)	20	—	40
分子生命化学専攻(M)	20	—	40
分子微生物学専攻(M)	5	—	15
バイオサイエンス専攻(D)			
地域環境科学研究科	8	—	16
林学専攻(M)	8	—	16
農業工学専攻(M)	10	—	20
造園学専攻(M)	6	—	12
地域創成科学専攻(M)	2	—	6
林学専攻(D)	2	—	6
農業工学専攻(D)	2	—	6
造園学専攻(D)			

→

令和5年度

入学 編入学 収容
定員 定員 定員

東京農業大学大学院 農学研究科	14	—	28
農学専攻(M)	12	—	24
動物科学専攻(M)	10	—	20
生物資源開発学専攻(M)	8	—	16
デザイン農学専攻(M)	5	—	15
農学専攻(D)	4	—	12
動物科学専攻(D)	3	—	9
バイオセラピー学専攻(D)			
応用生物科学研究科	30	—	60
農芸化学専攻(M)	20	—	40
醸造学専攻(M)	20	—	40
食品安全健康学専攻(M)	6	—	12
食品栄養学専攻(M)	5	—	15
農芸化学専攻(D)	2	—	6
醸造学専攻(D)	3	—	9
食品安全健康学専攻(D)	2	—	6
食品栄養学専攻(D)			
生命科学研究科	30	—	60
バイオサイエンス専攻(M)	20	—	40
分子生命化学専攻(M)	20	—	40
分子微生物学専攻(M)	5	—	15
バイオサイエンス専攻(D)	3	—	9
分子生命化学専攻(D)	3	—	9
分子微生物学専攻(D)			
地域環境科学研究科	8	—	16
林学専攻(M)	8	—	16
農業工学専攻(M)	10	—	20
造園学専攻(M)	6	—	12
地域創成科学専攻(M)	2	—	6
林学専攻(D)	2	—	6
農業工学専攻(D)	2	—	6
造園学専攻(D)	2	—	6
地域創成科学専攻(D)			

変更の事由

課程の変更(届出)
課程の変更(届出)

課程の変更(届出)

国際食料農業科学研究所			
国際農業開発学専攻(M)	18	—	36
農業経済学専攻(M)	8	—	16
国際アグリビジネス学専攻(M)	10	—	20
国際食農科学専攻(M)	7	—	14
国際農業開発学専攻(D)	2	—	6
農業経済学専攻(D)	2	—	6
国際アグリビジネス学専攻(D)	2	—	6
生物産業学研究所			
北方圏農学専攻(M)	7	—	14
海洋水産学専攻(M)	5	—	10
食香粧化学専攻(M)	5	—	10
自然資源経営学専攻(M)	3	—	6
生物産業学専攻(D)	8	—	24
計	334		717

国際食料農業科学研究所			
国際農業開発学専攻(M)	18	—	36
農業経済学専攻(M)	8	—	16
国際アグリビジネス学専攻(M)	10	—	20
国際食農科学専攻(M)	7	—	14
国際農業開発学専攻(D)	2	—	6
農業経済学専攻(D)	2	—	6
国際アグリビジネス学専攻(D)	2	—	6
国際食農科学専攻(D)	2	—	6
生物産業学研究所			
北方圏農学専攻(M)	7	—	14
海洋水産学専攻(M)	5	—	10
食香粧化学専攻(M)	5	—	10
自然資源経営学専攻(M)	3	—	6
生物産業学専攻(D)	8	—	24
計	344		747

6 課程の変更(届出)

東京農業大学		3年次
農学部		
農学科	170	680
動物科学科	140	560
生物資源開発学科	125	500
テザイン農学科	123	492
応用生物科学部	3年次	
農芸化学科	150	600
醸造科学科	150	600
食品安全健康学科	150	600
栄養科学科	120	480
生命科学部	3年次	
バイオサイエンス学科	150	600
分子生命化学科	130	520
分子微生物学	130	520
地域環境科学部	3年次	
森林総合科学科	130	520
生産環境工学科	130	520
造園科学科	130	520
地域創成科学科	100	400
国際食料情報学部	3年次	
国際農業開発学科	150	600
食料環境経済学科	190	760
国際バイオビジネス学科	150	600
国際食農科学科	110	440
生物産業学部	3年次	
北方圏農学科	91	364
海洋水産学科	91	364
食香粧化学科	91	364
自然資源経営学科	90	360
計	2,991	11,964

↑

東京農業大学		3年次
農学部		
農学科	170	680
動物科学科	140	560
生物資源開発学科	125	500
テザイン農学科	123	492
応用生物科学部	3年次	
農芸化学科	150	600
醸造科学科	150	600
食品安全健康学科	150	600
栄養科学科	120	480
生命科学部	3年次	
バイオサイエンス学科	150	600
分子生命化学科	130	520
分子微生物学	130	520
地域環境科学部	3年次	
森林総合科学科	130	520
生産環境工学科	130	520
造園科学科	130	520
地域創成科学科	100	400
国際食料情報学部	3年次	
国際農業開発学科	150	600
食料環境経済学科	190	760
アグリビジネス学科	150	600
国際食農科学科	110	440
生物産業学部	3年次	
北方圏農学科	91	364
海洋水産学科	91	364
食香粧化学科	91	364
自然資源経営学科	90	360
計	2,991	11,964

名称変更

東京情報大学 総合情報学部 看護学部 看護学科	3年次	400	10	1,620
		100	-	400
計		500	10	2,020
東京情報大学大学院 総合情報学研究科 総合情報学専攻(M) 総合情報学専攻(D)		15	-	30
		3	-	9
計		18		39

→

東京情報大学 総合情報学部 総合情報学科 看護学部 看護学科	3年次	400	10	1,620
		100	-	400
計		500	10	2,020
東京情報大学大学院 総合情報学研究科 総合情報学専攻(M) 総合情報学専攻(D)		15	-	30
		3	-	9
計		18		39

→